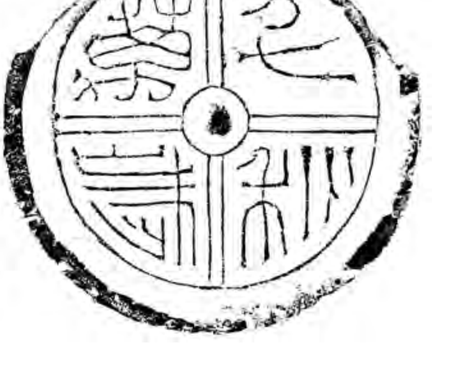
主図版① 「千秋万歳」の瓦当



図版②－1
主図版①と同様の文字配置で異なった字形

図版②－2
主図版①と同様の文字配置で異なった字形

「秦漢時代の瓦当と磚文」
②「千秋万歳（せんしゅうばんざい）」瓦当（がとう）　後漢時代

図版③　文字配置・文字構成の異なる千秋万歳瓦当

一、二世紀の古代の宮殿建築には瓦が使用され、軒先瓦の先端を飾る瓦当は、いろいろな意匠が施されてあった。土を練り、模範（鋳型）を用いて成形し、焼かれて完成する。現在でも、漢時代の長安城市の遺跡とされる建物が在った所からは大量の瓦当が発見されることもある。文字瓦当のなかで最も有名な瓦は、「千秋万歳」「長楽未央」「長生無極」などのお目出たい四字句の瓦であろう。「千秋万歳」は大変多く使用されたせいか、同じ語句でありながら、文字の布置の仕方が実に多用である。円形の中を四分割し、扇形の平面に、篆書体を用いて巧みに文字構成をしている。四字配置の方法もいろいろな工夫を見ることが出来る。主図版①に示した「千秋万歳」は、四分割したそれぞれに更に装飾の線を各二本加えている。その下に付した二件（図版②－1、2）は、同じような文字配置であるが、それぞれの字形は異なっている。補助図版に示した十二件の千秋万歳（図版③）は、文字配置、またそれぞれの文字構成が異なっている。四字の文字を様々に工夫しており、古代の文字を扱う職人の文字意匠の一端を知ることができるのではなかろうか。

皆さんの忌憚のないご意見、ご感想をお聞かせください。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院

平成の群像（2017）

「存在の祝福」 22×37㎝　　吉永春園書

吉永春園

存在の祝福

　ある日、私の書道教室の知子さんから「先生今日は〝存在の祝福〟でお願いします」との事、月1回の稽古日、知子さんは心に残った言葉、感動した事、実行したい事等を自由に書いている。私は稽古日には知子さんの口から何が飛び出すか期待と不安でいっぱいなのです。さて〝存在の祝福〟良く考えてみると、とても重く、哲学めいた言葉です。愛くるしい赤ちゃんは、そのままで皆に祝福され、道端に咲く小さな花は通りすがりの人を喜ばせ、便利な道具は、それを使う人に重宝がられる。また、蜂は花にとっては受粉を手助けしてもらう大事な存在であり、一方蜂にとって花は甘い蜜をもらう大事な存在であるのです。この様に人であれ、動植物であれ、物であれ、存在するものは何処かで誰かに祝福され、愛され、喜ばれているという事なのでしょう…と私なりに考えてみました。

　この言葉を知子さんからいただき、昨年の全国学生書道展の指導者展の題材にしました。そしてこの額は今、野辺山の知子さんの別荘の壁に掛けられています。

　書を始めて60数年、色々な事が思い出されます。子供の頃、先生の横に、いつも静かに座っていらした奥様から帰り際に半紙に包まれたお捻りをいただきました。中身は真っ赤なぐみの実、嬉しくて大事に、つぶさないように家まで持ち帰った事も。また教室の中では時折、騒いでいる子の頭上に大きな雷が落ちる事も。全国学生書道展、書道芸術院展と出品を重ね、その結果に一喜一憂。そして時が過ぎ単位認定講習会にも参加するようになりました。

　群馬県赤城山での前衛書の講習を受講しました。講師は中島邑水先生、先生は大きな筆を、まるで赤ちゃんをだっこするように2本の腕に大事に抱えて「可愛い、可愛い筆なんだよ」と。書き始める前には紙の前に仁王立ちになって膝を折り、両手を肩幅に広げてゆっくりと回し、まるで太極拳の動きの様でした。きっと気持ちを落ち着かせ、構想を練っておられたのでしょう。今でもその時の光景が目に浮かびます。

　時には挫折し、悩み、進む道に迷う事もありましたが、院の先生方のご指導、お仲間との交流に助けられ、日頃の不勉強を悔やみつつも書の道を続けております。

　絵でも書でも表現するものはその人の人となりが如実に現れてしまいます。作為のない美しい書を目指して日頃から良いものに触れ、自分自身を磨き高めて行きたいと思っております。

〝終わりなき学びの道や草萌ゆる〟　恵子

書のひろば

理事長　辻元大雲

第70回記念書道芸術院展 一般公募・無鑑査鑑別審査終了

前回展より若干の減少となった一般公募・無鑑査の鑑別審査は1月14・15両日、浅草橋の共和会館にて総勢150名余の当番審査員・審査委員・総務部などの担当者にて行われ各賞が決定した。未表装で行われ、無鑑査と一般公募褒状以上の入賞作品は2月8日に表装の上、都美審査会場に再搬入される。

一般公募の入賞率は全体で60％とし、準特選46点、佳作135点は昨年並みとした。褒状は217点となった。

無鑑査入賞率は全体として40％、院賞12点、毎日新聞社賞は各部1点計5点、70回展記念賞は部門のバランスを考慮して計10点、特選111点と昨年並みとし、秀作は240点となった。

審査結果は各団体および入賞入選各個人に通知されているのでご確認いただきたい。2月15日陳列、16日から21日までの会期、19日の表彰式・慰霊祭・祝賀会などが帝国ホテルで開催される。多くの方々のご参加をお願いしたい。祝賀会費15000円、早めのお申込を。

16日14時より「日本上代金石拓本展示」特別講演会が都美講堂にて開催される。講師伊藤滋先生。定員200名、先着申込を事務局にて受付中。

2017現代の書新春展盛会に

新春恒例となった毎日書道展代表作家による「2017現代の書新春展」は東京銀座、和光会場とセントラルミュージアム銀座2会場で開催された。

和光会場には本院より下谷洋子、辻元大雲2名が出品、セントラル会場には種谷萬城・千葉蒼玄・前田龍雲の3氏が出品した。会期中6日に千葉蒼玄さん席上揮毫、8日種谷萬城さんが作品解説を行った。

銀座画廊美術館では「毎日チャリティー書展」が開催され売り上げが社会事業団に寄贈された。ご協力に感謝申し上げたい。

和光出品の下谷先生と辻元

TOKYO書2017 公募団体の今 新春幕開けに 尾形・大沼・前田3氏

1月4日、東京都美術館企画の「TOKYO書2017 公募団体の今」が新春幕開けに賑やかに開催された。都美の新企画として今回が5回目となった。一人幅10ｍ、高さ4ｍまでを限度としての大作中心、関東を中心とする主要書道18団体から1～4名が推薦され計38名の出品。

本院からは現代詩文書部の宮城県尾形澄神氏が360×340㎝を2点、自詠の句をダイナミックに表現。篆刻・刻字部、同じく宮城県の大沼樵峰氏は2×6尺大の刻字2点と4字句大印の篆刻1点計3点の出品、大阪府の前田龍雲氏は「白黒」2字句を275×537㎝に青淡墨で大胆に表現した。

役員と出品者

この企画展は今後絵画との交代で隔年実施となる予定で継続される予定。

第32回毎日現代書関西代表作家展 恩地春洋先生を偲び盛況に開催

新春恒例となった「毎日現代書関西代表作家展」大阪天王寺の近鉄百貨店阿倍野店にて1月12日～17日まで開催、関西地区の毎日書道展審査会員・会員・会友などが出品350点余、前後期陳列替えの充実ぶりで財団理事・監事の賛助出品も。特別企画展示として今回は「種田山頭火」の生涯と句集、書作品など充実の展観であった。

小林琴水先生席上揮毫

会期中には連日出品者による席上揮毫の開催、中でも14日には昨年ご逝去された恩地春洋先生を偲んで小伏竹村・小林琴水両氏によるトークと小林さんの席上揮毫は、本展創設の功労者の功績や人となりを偲び、涙溢れる心打たれるひと時となった。

北陸代表作家展も福井県美で開催予定

2月4日から8日には福井県立美術館にて「2017第25回記念・毎日現代書北陸代表作家展」が開催される。北陸地区毎日書道展所属作家380名余と毎日書道会理事・監事の賛助出品作は関西代表作家展から巡回出品される。ご高覧を。

21世紀の書

—私の主張—

漢字（五）

生田翠龍

＜布置章法＞

布置章法は、書法の三大要素の一つですが、揮毫の上では感興による構想が具現化する「制作の現場」です。

日頃から気に入った詩文に出合うと字調べをし、字典では字例に限界があり、書の古典から字を引くとしても大変です（しかしながら初学者はこの作業を絶対に欠かしてはいけません）ので、これはと思った能書や古典の字書を作ったりもしました。しかし、布置や章法はそうした作業の延長にあるわけではありません。

私はいつの頃からか＜書稿＞と称して、方眼用紙のノート等に縮小した形式に書き込んだ創作計画書をつくり、清書の紙を¼にして習作を少くとも4テイク作成します。

※

通常はそのようにして清書に至るのですが、感興によっては全く思いがけない展開となる事があります。写真掲載の作品はまさにそうで、準備した布置章法を一切捨て、テイクオフした二八版の長条幅作品です。

書展の締め切りが迫る中、ある少年の事件にどうにも居たたまれないでいる今の自分は、準備していた詩文は書く気にはなれないでいました。

そこで、この心境にあう詩文はないものかと、めくっていた時に、ふと思い出したのが、王令の『哭詩六章』第三首でした。

「切切、切切切」で始まるこの詩をどう表現したものかと思案した経緯はありますが、今の自分の心情を表現する詩だと思った瞬間、この詩しか目に入らなくなりました。何かに急がされるように3行書きにしたのですが、満足出来ません。遂に「行書き」も捨てて、この布置に書き終えたとき、「出来た！」腑に落ちた作品です。

全体がナイフのような形になっているのは望外の結果でした。

（図）長条幅・二八版

かな（五）

勝山初美

拡大臨書

書泉会は、長年拡大臨書に取り組んでいます。一昨年は「藤原佐理」と「関戸本古今集」の拡大臨書を課題とし、勉強会を重ねてきました。

まず、決められた箇所を半切½に臨書し、字形・筆遣いなど特徴を指摘し合い確認しました。原帖の拡大コピーをカラーにすることで、より点画・筆遣いなど原寸では見えない線が確認できたのには驚きでした。清書はそれぞれ選んだ場所を半切に仕上げました。

古筆を拡大臨書するには線質が問われます。曖昧にならぬよう緩急・起伏の微妙な線の変化を拡大し、より理解した上で、深く見て思考することが大切です。

先日、佐久臨書展を拝見してきました。小学生の臨書作品、元気いっぱいの造像記や気迫の込もった中・高生の作品、一般では田中親美先生の料紙に書かれた本阿弥切が一際目をひいていました。また田宮文平先生の提案で拡大臨書が推奨され展示されていました。

用いる紙・筆・墨もそれぞれ違います。呼吸や速度など、かなのリズムや自分なりの感性で拡大臨書することは、線の鍛錬になり創作につながるものと思います。

関戸本古今集　拡大臨書

勝山初美書

現代の書　新 春 展

今 い き づ く 墨 の 華

（２０１７）

和光ホール27人展 2017年１月５日㈭〜11日㈬ 銀座・和光本館６階
セントラル会場100人展 2017年１月５日㈭〜11日㈬ セントラルミュージアム銀座
主催：毎日新聞社・（一財）毎日書道会

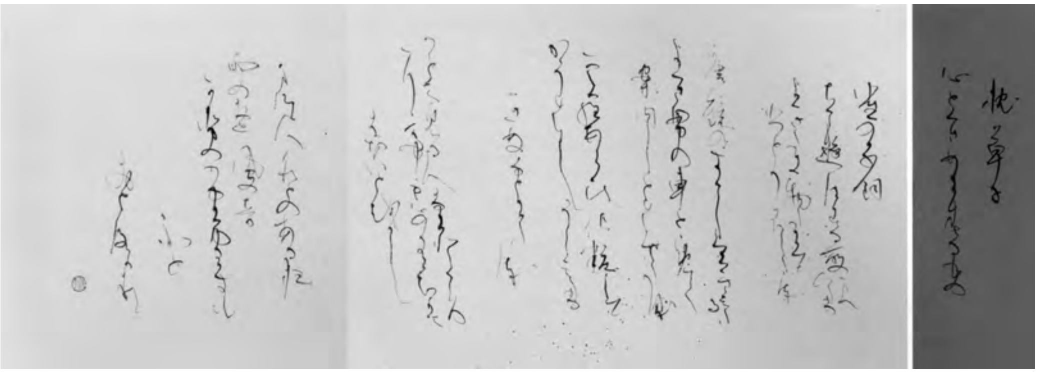
〈和光ホール27人展〉

干支文字

辻元大雲

「 久方壽満子の歌 」　73×164㎝

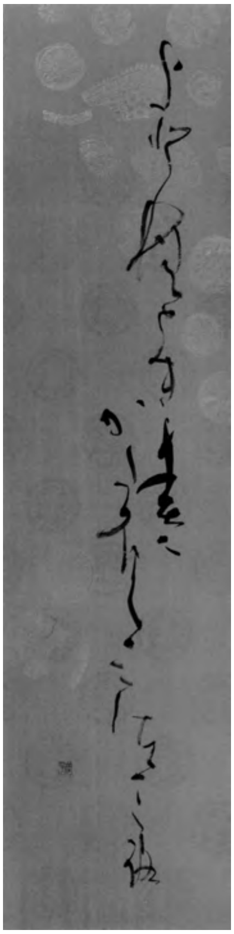
干支文字



下谷洋子

「 心ときめきするもの 」『枕草子』　右 28×９㎝、左 28×70㎝

「春意」上田五千石

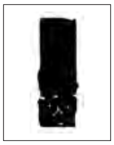


下谷洋子

138×35㎝

〈セントラル会場100人展〉

干支文字



千葉蒼玄

「 INSPIRE 」 73×152㎝

干支文字

「清」

前田龍雲

121×89㎝

干支文字

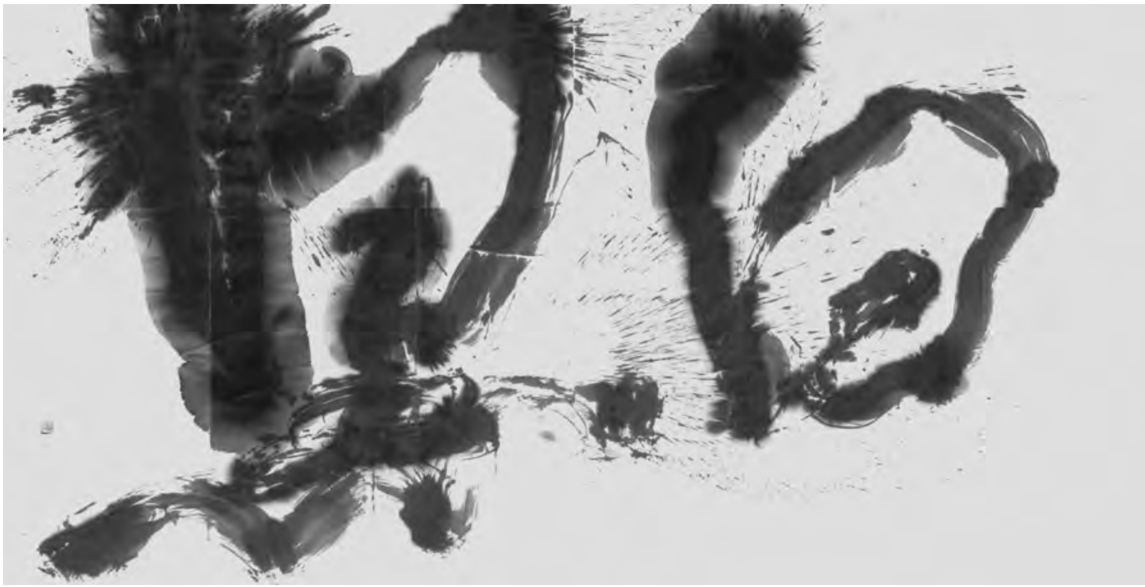
「爲腹不爲目」『老子』第十二章

種谷萬城

138×63㎝

TOKYO 書 2017
公募団体の今

＜日　時＞　平成29年１月４日㈬～15日㈰
＜場　所＞　東京都美術館（上野公園）
公募展示室　ロビー階　第１・第２
＜主　催＞　東京都美術館
（公益財団法人東京都歴史文化財団）



前　田　龍　雲　「白黒」　275×537㎝

尾形澄神「旅の空」
360×341cm

尾形澄神「報にむせぶ」
380×336cm

大　沼　樵　峰　「妙言無古今」　61×157㎝

大　沼　樵　峰　「好学不倦」　61×155㎝

大　沼　樵　峰　「大隠々朝市」　70×105㎝

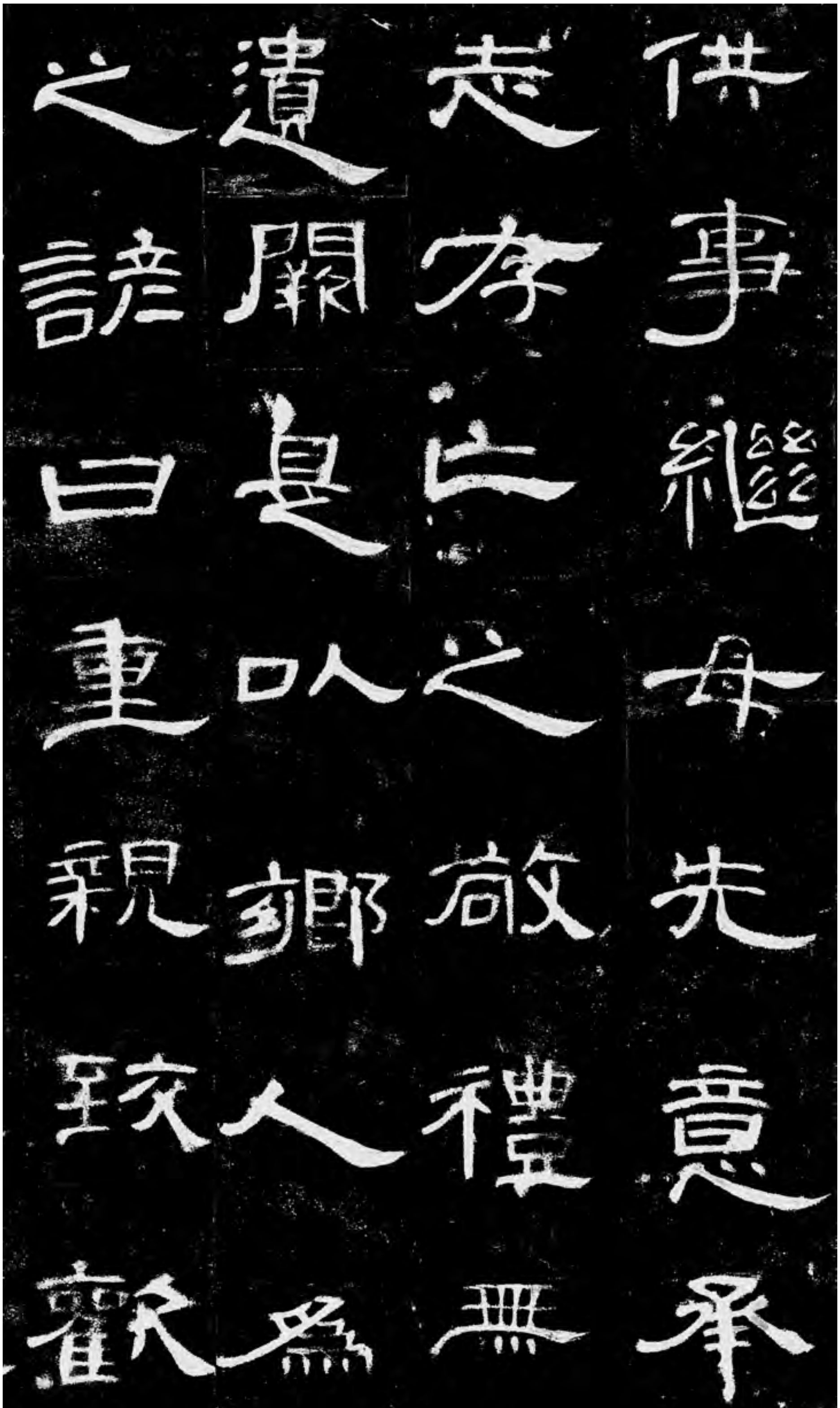
漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。

曹全碑（後漢）②

〈**解説**〉隷書の主な特徴として、①字形は扁平、②横画は水平・等間隔、③起筆は逆筆・蔵鋒、④運筆は中鋒（筆先が主に線の中央を通る）、⑤波磔（横画や右払いの収筆のうねるリズムのこと。波磔をつけるのは一字の中で一画のみ。一字一波）などがあげられる。

曹全碑は、伸びやかな波磔が美しく、秀麗典雅な書風は八分隷（波磔をもつ装飾的要素のそなわった隷書）の特色をよく伝えている。（編集部）



（掲載図版81％縮小）

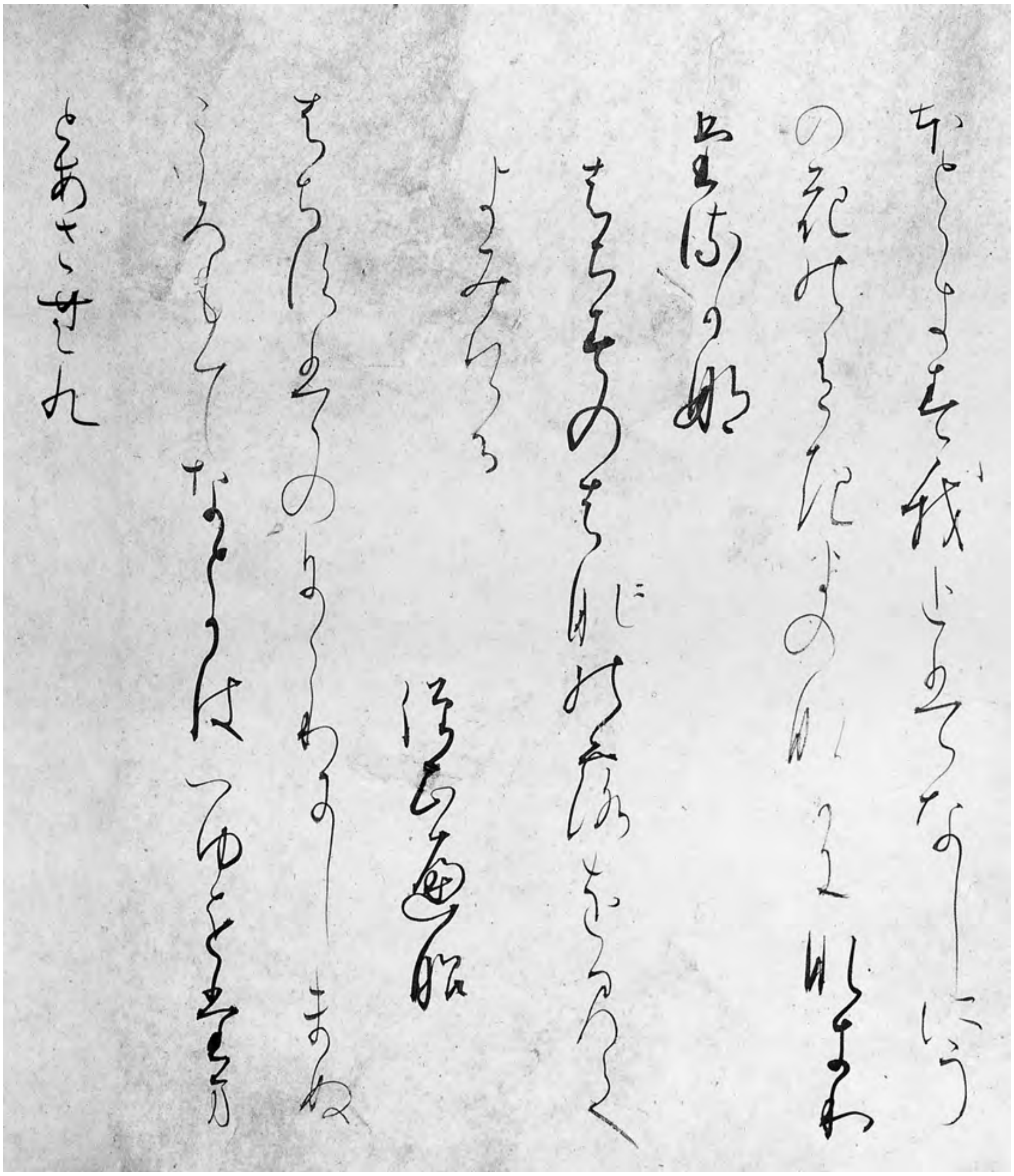
供事繼母。先意承／志。存亡之敬。禮無／遺闕。是以鄉人。爲／之諺曰。重親致歡

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

⑮⑤

関戸本古今和歌集 ②
（伝 藤原行成筆）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）



（個人蔵）

〈よみ〉

ほとゝぎす我とはなしにう
の花のうきよのなかになきわ
たるかな
　はちすのはなの露を見て
　よみける
　　　　　　僧正遍昭
はちすばのにごりにしまぬ
こゝろもてなどかはつゆをたま
とあざむく

〈解説〉

関戸本古今和歌集では、和歌一首が料紙のもっとも高い位置から2行または3行に並列式に書かれている。詞書はそれよりも2字ほど下げ、さらに低い位置に読人（作者名）が記されている。

構成の特徴としては、メリハリの利いた多彩な表現が用いられていることである。かなを一字一字切り離して書いたり、5字も10字も続けて連綿を施したり、墨の濃淡や潤渇、運筆の速度や筆圧に変化をつけるなど、臨機応変にリズミカルに書きあげる筆者の豊かな表現力が人々を惹きつけてきた。

（編集部）

※掲載図版80％縮小

かな研究部 臨書課題（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。**（**全臨も可**）

特別研究部 臨書課題（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）
上記の掲載以外も可。

漢字規定　初段以上【三月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

辻元大雲選書

柴門疎竹處　よみ（柴門疎竹の處）

書体＝自由

習い方解説 (五)

辻元大雲

柴門疎竹處　（楊萬里）
（柴門疎竹の處）

今回は5字句です。茅屋（粗末な家）萬山竹林の中にありの意味で、隠遁生活を送るわび住まいへの憧れを述べています。

やや重厚な線質で、顔真卿の争座位文稿の風を意識しながら表現してみました。筆はやはり柔らかめの羊毫中鋒筆を使用しました。一部草書表現「門、竹」が混じりますが、全体の調和を考えていろいろ工夫してみてください。

書写体による字形の変化は書の表現にとってなくてはならないものです。常用漢字体では書表現に向かないと感じることが多々あります。今回の「疎」は「踈」となり「處」も色々変化します。現代詩文書ではどうでしょうか。原文尊重となると常用漢字使用の短歌や俳句、詩など悩みはつきません。

漢字規定 秀級以下【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

川島舟錦選書

清香可愛 よみ（清香愛す可し）

書体＝楷書

習い方解説（五）

川島舟錦

清香可愛『鉄笛倒吹』
（清香愛す可し）

演題、式次第、看板、賞状、お祝いやお香典の表書き、封筒やラベル、命名などなど。凛と美しく整った文字でと、依頼されることも多いと思います。

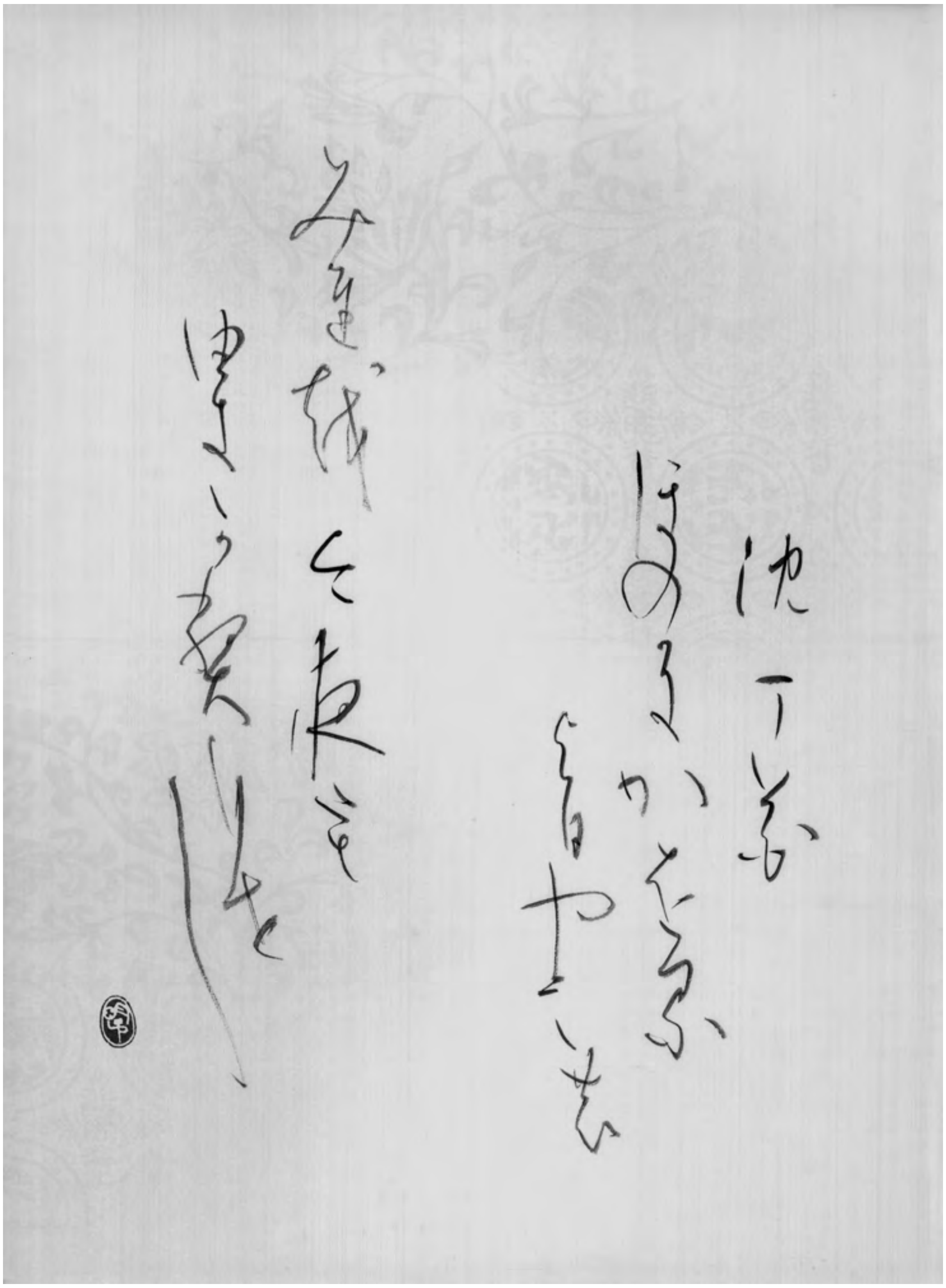
臨書で鍛え、作品作りで苦戦しながら、細字も書けるようになること……なかなか大変です。

練習すること、経験を重ねることが上手になるコツ。たとえば、賞状を300枚書こうとするとき、うまく書けなくてもこらえて書き続けていると、200枚を超えた頃から少し筆が動き出すものです。

書作品は、持ち味をいかし、個性を大切に表現するのがいいですが、実用書は、素直に清らかに書きたいですね。

かな規定　初段以上【三月十五日締めきり】用紙　**半紙**普通判（**料紙可**）

石井明子選書



よみ方　沈丁花ほのか(可)に(尓)かをる(累)宵(与日)や(也)み(三)の(農)道(み遅)を(越)今夜も(毛)ゆ(由)き(支)か(可)へ(弊)りせ(世)し

創作

習い方解説 (五)

石井明子

沈丁花ほのかにかをる宵やみの道を今夜もゆきかへりせし

（佐佐木信綱）

みなさんは、作品化する和歌や俳句は何を基準に選んでいますか？私は、内容がよく理解でき、好きであること、季節感があることを大事にしてきました。

書きたい言葉や文字が明確なのは見方を変えれば偏りでもあるので、囚われ過ぎると美しい作品を生み出すことから遠のくことになる可能性もあるので要注意です。

作品にして美しい文字とそうでないものは確かにあり、「字面が良い、悪い」という表現で指導を受けてきました。一理あります。

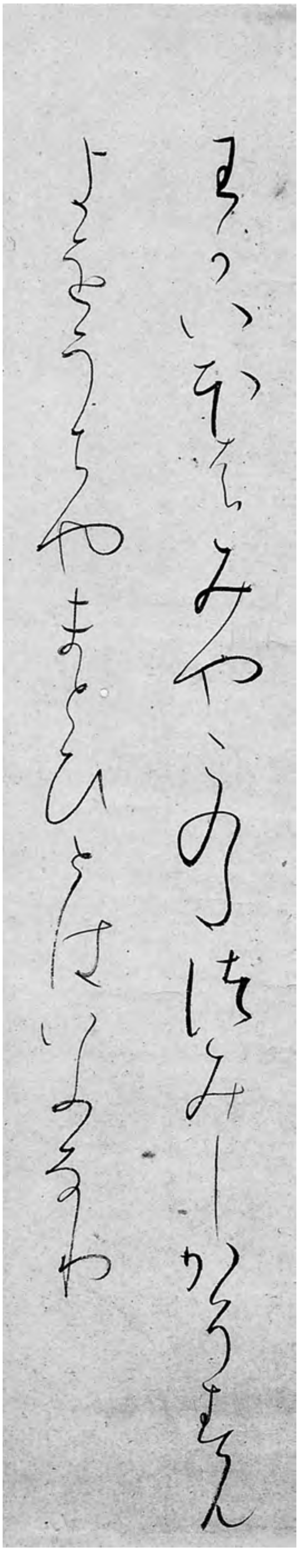
密度の濃い作品創りのために、時間をかけて、メッセージ性のある題材を選びましょう。

今回の「沈丁花」は、この時期に必ず書きたくなる文字であり、好きな花なので選びました。

かな規定　秀級以下　【三月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（**料紙可**）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を**臨書**する。または**部分（2字以上の連綿）**を**臨書**する。

高野切第三種
（掲載写真縮小93％）



よみ方　わ(王)が(可)いほ(本)は(者)みやこのた(多)つ(徒)みしかぞ(曽)す(春)む(无)
よをうぢやまとひとはいふな(奈)り(利)

かな条幅規定　【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（**料紙可**）

見越雪枝選書

よみ方　ほのぼの(丶丶)と紫匂(尓報)ふ(布)朝ぼ(本)らけ(介)
うぐ(久)ひ(比)す(春)の声山よ(与)りき(起)こゆ

創作

※たて形式に限る

習い方解説 (二)

見越雪枝

ほのぼのと紫匂ふ朝ぼらけ
うぐひすの声山よりきこゆ
（清水比庵）

同じ形の文字が続く時や同じ字幅が重なる時などは、変体がなを入れる事によって自然な流れになります。

潤筆の時は、スピードをつけてやや小さめに書き出すと作品が重くなりません。さらに渇筆の時は、大胆な筆致で、動きを加えると作品が活き、美しいバランスになります。

漢字条幅規定　初段以上【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

小竹石雲選書

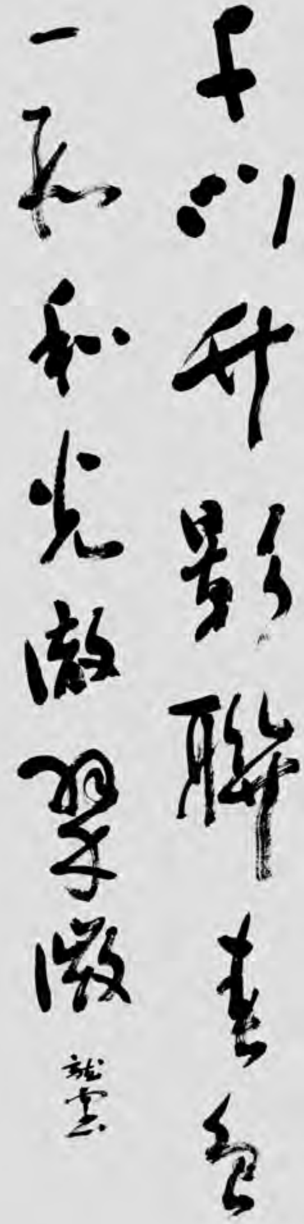
春従何處來　拂水復驚梅　雲障青瑣闥　風吹承露臺　（呉均）

（春は何処従り来たれる、水を払い復た梅を驚かす、雲は青瑣の闥を障え、風は承露の台を吹く）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

前田龍雲選書



千門竹影聯春色　一段和光徹翠微　（陳素風）

（千門の竹影春色を聯ね、一段の和光翠微に徹す）

書体＝自由

習い方解説（五）

小竹石雲

春の訪れを詠じた喜びにあふれた詩です。明るく伸びやかな少しウキウキした感じで書いてみました。そのため、筆は長鋒を使用し、運動は闊達に、羊毛筆のしなやかさが生きるように、筆先の立ちあがるのを待って書きましょう。

また、大小、太細の変化は十分つけて楽しんでみました。20文字でやや多いので騒がしくならないようにしましょう。

※たて形式に限る

習い方解説（五）

前田龍雲

意味は「村里の竹林にも春が訪れ、山にも春光が満ちている」です。

今回はなるべく無駄な線を省きすっきりとした草書で書いてみました。とかく草書は誤字になりがちです。隷書や楷書ではどう書くかを常に頭に浮かべて書くと誤字にはなりにくいものです。是非この機会に初心者の方も草書に挑戦してみてください。

ペン字規定【三月十五日締めきり】

塚越紅苑選書

春よ来い早く来い
歩きはじめたみいちゃんが
赤い鼻緒のじょじょはいて
おんもへ出たいと待っている

紅苑書

用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説（五）

塚越紅苑

立春とは、初めて春の兆しが現われてくる頃のことです。暖かい春風が吹いて、川や湖の氷が解け出すころ、草木が芽吹き、花が咲き、鳥がさえずる姿にふと気づくたび、自然と顔がほころびます。ささやかな日々の移ろいに人は古来心動かされてきました。

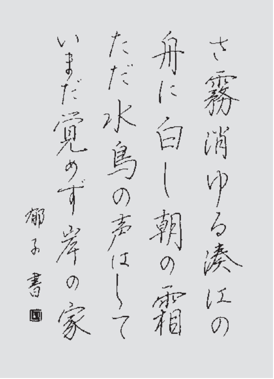
みいちゃんとは、作詞した相馬御風の長女（文子）がモデルとされている。じょじょ（草履）おんも（表・外）雪に閉ざされた越後の冬で、静かに春を待ち望む人々の強い思いが伝わってきます。

文字を正しく美しく書きたい。文字を書く生活を豊かにしたい。こんな願いに応えるために練習を重ねてみましょう。のびのびとペンを進めてみて下さい。

※落款を必ず入れる。
（**自分の名前**を入れること）

今月のホープ作品　各部総評　NO.668

ペン字部　師範　岩上　郁子
豊かな運筆に流れも加わり、布置まで統一感のある安定作。確かな筆致が明快さと余白美を醸し出す。
◎ペン字部総評　全体的に楷書の美しい作品が多く良かった。年の始めにあたり、今年の目標をたて日頃からの研鑽を望む。（和楓評）



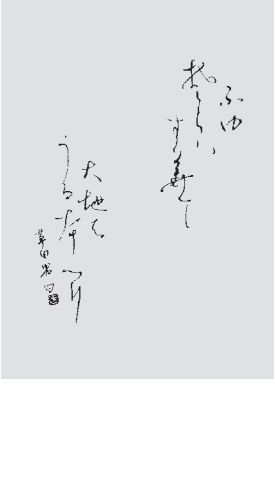
漢字条幅部　師範　礒貝　清耀
軽快な運筆のリズムが爽やかで明るいムードを醸し出す。濃墨の艶と渇筆がよく調和する。
◎漢字条幅部総評　書体自由な条幅部門ながら参考例に頼る作多し。字形の変化に線質が伴ってない作が多く更に鍛練を。（大雲評）

現代詩文書部　特選　高野　水仙
少々誤字くさいところもあるが句意のもつ気宇雄大さが遺憾なく発揮されて思いが伝わってくる。
◎現代詩文書部総評　文字構造を理解したうえで変化をつけたい。自分勝手なものが多い。（石雲評）

前衛書部　特選　庄司　紫千
上部の空間が想像へと誘う詩のある作品。線質の微妙な変化と潤渇の変化に優しさをのぞかせる。
◎前衛書部総評　院展作品等で書き込んだ為か充実作多数。より新鮮味のある作品を期待。（京子評）

かな条幅部　師範　吉田　佑子
漢字と平がなのみを使用した簡潔な表現は俳句には相応しい。印を含めて総て控え目が格調高い。
◎かな条幅部総評　墨色の冴えない作品が多く残念。かな用の紙を使用することで多くは解決できます。印もかな用で！（明子評）

かな部　師範　宇田川春華
２字代わっただけですが、巧く溶け込み華やぎました。文字の大小、線の太細も的を得ています。
◎かな部総評　者は利用頻度の高い変体がなですが誤字多く小さいとシンプルな趣は線が細く貧相に見える。（洋子評）

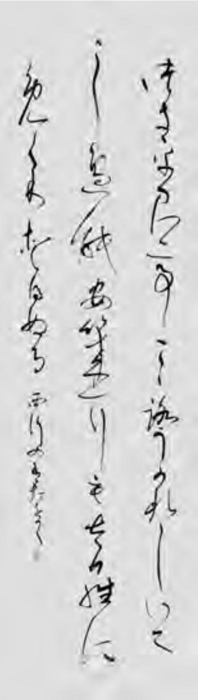


漢字部　師範　押元　順子
側筆と直筆を使い分けて硬質な味わいをねらった現代的な隷書。墨量に気を配った渇線が効いた。
◎漢字部総評　「研究部」の蘭亭序の趣をいかして優美な作が多かった。下級の方（かた）は「研究部」に挑戦を！（翠風評）

今月の
特別研究部優秀作品（特選）

かな（奥田）　小林純風

「月を見て…」



小林純風書

170×48㎝

◆2×6尺に歌1首、力みなく、しなやかな流麗な作品となった。3行目、墨量の変化欲しい。（多希子評）

◆爽やかな運筆のリズムが安定感ある3行構成と共に落ち着いた情感を醸し出す。切れ味よい作。（大雲評）

◆書き馴れた書線で明るく、見ごたえのある作となっている。行頭の高さに変化がほしい。（仙草評）

◆運腕大きくテンポの良い作品になった。更に文字の大小・墨の濃淡の変化を意識し、メリハリある作品を。（鄭街評）

現代詩文書（蒼風）　笹木蒼風

笹木蒼風書　60×136㎝

「城中井戸」

◆ほんのりやさしい筆使いが独特のリズムを醸し出し、余白の広さが紙面に余裕を持たせている。（大雲評）

◆細線を駆使し、明るく爽やかな作品になった。縦画の収筆が長すぎたため切れ味が弱まった箇所あり。（鄭街評）

◆変化に富む行構成は、下部に余白をとった明快な作。しなやかな細線が随所に走り、作品を引き締めた。（多希子評）

◆字形のバランスよく、潤渇がきいて明るく見ばえのする作となった。さらに書線の強弱がほしい。（仙草評）

漢字（八街）　小川白柳

小川白柳書　54×175㎝

「七言絶句」

◆行間明るく、安定感ある横形式の行草作。文字の粗密を意識して、さらにダイナミックな作品を期待。（鄭街評）

◆七言絶句を横形式に安定感よくまとめた。潤渇の変化がリズムを醸し出し、鋭さと共に暖か味ある作。（大雲評）

◆実力ある横作品で躍動美ある安定作となった。上下のバランスと墨量の変化でさらなる発展を期待する。（仙草評）

◆躍動感に溢れ、強弱に富んだ重厚な作。筆力溢れるエネルギッシュな線条に圧倒される。（多希子評）

臨書 （千葉） 竹浪叙舟「蘭亭序」

◆やや拡大した中細字臨書は暢びやかな中にしっとり滋味ある作。一貫した乱れない姿勢は見事。（大雲評）

◆字形線質共に自在。伸びやかで、熱心な臨書態度が作品に現れている。落款一考を。（仙草評）

◆2×6尺に8行全臨。紙面構成もバランスよい。根気強くじっくりと取り組むその姿勢に敬意を表します。（鄭街評）

◆張金界奴本蘭亭序を丁寧に全臨した集中力は見事、原帖を理解し、字間・行間も整然として心地よい。（多希子評）

竹浪叙舟臨

174×55㎝

前衛書 （容州社） 阿部邑里「心象」

◆潤渇のバランスよく空間処理も見事で流動感ある作となった。下部の書線を強調しすぎた感あり。（仙草評）

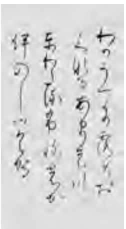
◆複雑に回転しながら上部から下部の爆発へ。絶妙の動きが見る人をワクワクさせる作品になった。（鄭街評）

◆連続して特選は立派。リズミカルな運筆がダイナミックな気分を漂わせ、動きある快作。（大雲評）

◆上から下へ、紙面を走る線はリズミカルで、作者の鼓動が伝わってくる。飛沫が爽やかさを添える。（多希子評）

臨書 （千葉） 平野笛舟「曼殊院本古今和歌集」

部分拡大



平野笛舟臨

145×60㎝

◆曼殊院の特長を良く観察し、長く続く細線の渇筆部分もゆるぎがない。澄んだ線条は清々しく心地良い。（多希子評）

◆澄んだ細い線が空間に溶け込み明るい作品となった。古筆の料紙と相まって美しい作品が完成した。（鄭街評）

◆ほぼ原寸に近い形式に、料紙の色合いの違いを生かした着実な臨書。潤渇の変化バランスもよい。（大雲評）

◆古筆の特徴をよく理解し、丁寧に最後まで集中し料紙にまとめた。特に潤渇の変化は見事で、技術の高さが窺える。（仙草評）

阿部邑里書

180×60㎝

創作の部（59点）
漢字—10点
かな—6点
現代—19点
篆刻—1点
前衛—23点
臨書の部（22点）
漢字—19点
かな—3点

総出品点数 81点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
大雲 江本 興舟
恵雅 板橋 雅邦
もく 西川 藤象

「かな」
松延 藤原三枝子

「現代詩」
大雲 長島 僊雨
八戸 市川 紫泉
玄穹 千葉 紅雪
一弦 工藤 蔓

「前衛」
一葦 中村 一琴
大拙 大庭 幸石
青蓮 小野 朱里
蓮紅 大友 紅蓉
蓮紅 田村 紅沙

（臨書の部）

「漢字」
英峰 佐藤 桂香
大雲 名取 美紬
英峰 渡邉 多佳
無門 酒井 如雲

「かな」
英峰 吉瀬 彩雨

清耀　祥扇　由美子　久美　岳舟　静溪　成山　恵子　弘枝　小桃　彩香　美保　紫千　雅悠　良子　純風　翠陽　葵龍　信代　白篁　美楓　祥雲　桃華　順一

漢字研究部（蘭亭序）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

佐藤弦佳

漢字研究部　特選　佐藤　弦佳

筆先大いに活躍し、細部に至るまで力の抜けた線がない技量に感心しました。3字目が少し大きすぎた点も、全体を5文字でまとめ、左下に余白を作ってバランス良く落款を添えたことで章法をうまく処理しています。見事。

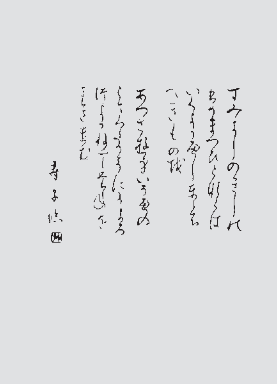
◎漢字研究部総評

課題の写真は張金界奴本で、蘭亭序の模本の中では技巧的なものです。これを濃墨と長鋒によって臨書すると、線がくどく重過ぎるものになりやすいと思います。穂先の開閉技術が要求されるので、初心者は中濃墨から臨書に慣れるほうがよいのではないでしょうか。半紙も仮名を書くような薄い紙は適しません。師に就いておられる方は拓本の見方とともに適切な用具の使い方を教わるとよいと思います。秀作以上の人はさすがでした。

かな研究部（曼殊院本古今和歌集）

選評　勝山初美

今月のホープ作品



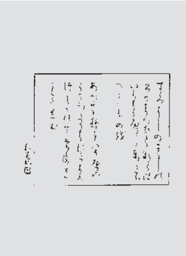
伊藤寿子

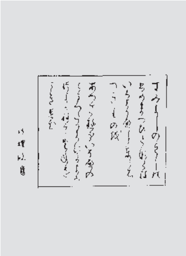
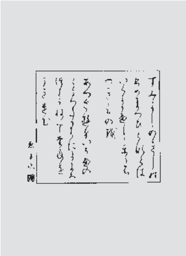
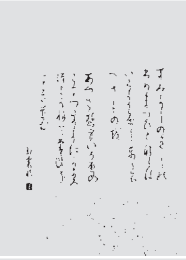
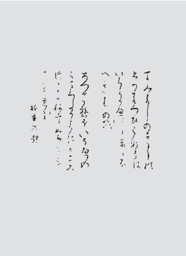
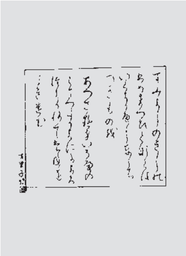
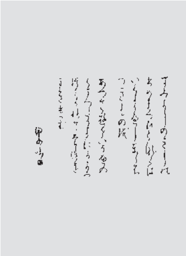
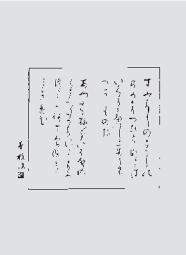
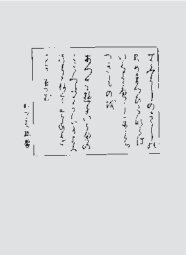
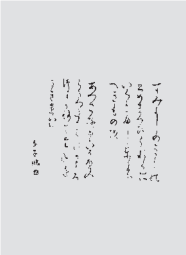
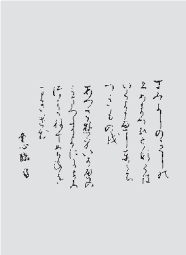
かな研究部　特選　伊藤　寿子

墨量の変化が美しく字形も整い、おおらかでゆったりと流れるような運筆は、良く特徴をとらえ見事です。優美で気品高い秀作となりました。

◎かな研究部総評

今回は誤字も少なく、総体的に良く書かれていました。字形は良いのですが、墨量の濃淡に乏しく惜しい作品が見受けられました。さらに丁寧な観察を！



和子　紅霞　芳枝　洋子　幹生　かつえ　清耀　万里子　泰子　恵子　絢水　奎心

かな研究部成績表

特選

AI　伊藤寿子
清月　境野和子
玉松　橋本紅霞
蕙書　関口芳枝
水海　飯泉洋子
うる　飯高幹生
やま　齋藤かつえ
大雲　礒貝清耀
紅風　福田万里子
如月　松本泰子
上泉　中尾恵子
宗苑　茂木絢水
青蓮　沼田奎心
AI　清水由紀子
紅瑤　須田香舟
硯水　宮澤草秋
松村　阿久澤隆華
上泉　中村シゲ子
秀水　富澤理恵子
青木松月
桜草　松本百合子
陽陽　岩崎陽光
もく　青木藤漣
玉松　青木葵郷
AI　藤村昌子

秀作（50音順）

澄春　阿天坊洗草
もく　新井藤雪
やま　伊東京子
高真　岩上郁子
澄春　宇田川春華
たか　梅津佳代子
もく　岡部久子

佳作（50音順）

琇韻　加納順子
福山　川崎綾美
うる　木村順子
附中　国峰理佳
蘭鼎　小板橋さくら
こだ　小島ふみ子
奥田　小林純風
蒼陽　込山美艸
潮音　齋藤杏邑
蕙書　坂本里美
硯水　佐々木雅芳
八生　篠田恵美子
澄春　新行内満子
竜泉　高橋雅泉
卯月　高橋佳子
玉松　田中耶衣
もく　戸部藤風
玉川　中澤綾
遊雲　西澤彩峰
玉川　野中喜子
たか　浜野永篁
正華　東田敏子
千葉　平山彩華
長月　平山さだ子
前橋　別府信子
大雲　堀切幸雲
生大　牧野清次
長月　増田佳子
石習　松丸愛石
五葉　森田睦子
竜泉　森田龍博
華仙　山口雪翠
清月　大和由紀江
高陵　會木勇介

入選（50音順）

遊雲　安部明隆
菊月　新井恵子
千葉　安藤叙孝
椿翠　安藤美代子
こだ　五十嵐佳栄
うる　今関心華
たか　梅木篁山
高井　榎田和子
こだ　大石星祥
附中　大石三枝子
玄穹　尾形紅霞
澄春　小川輝峯
玉松　小川彩香
安波　小野寺久美
片岡照徳
華祥　加藤雅芳
ここ　加藤翠陽
蘭鼎　川﨑優子
梓江　川元茱仙
幕張　北村恵舟
英峰　吉瀬彩雨
大雲　草刈眞華
〃　黒柳竹葉
清月　小林嘉江
竜泉　後藤良泉
菊月　斎藤功
春汀　佐々木和子
高崎　神宮玉枝
土気　杉田祥風
鈴木睦心
幕張　高橋賢雲
澄春　高橋幸苑
やま　田玉哲子
上泉　塚本ちえ子
皓映　豊嶋勝
雲溪　仲西游溪
玉松　長谷川千峰
はせ　長谷久子
樹原　早坂梅艸
前橋　春山勝美
蓮紅　本田美雪
千葉　松重翠景
菊月　宮崎英明
あか　本吉明香
桜草　守友志津子
椿翠　安嶋眞砂子
玉川　谷知裕美子
やま　山口律子
無門　山中清玉
紅瑤　藍澤白珧
竜泉　浅川みな江
千葉　足立万琇
埣和　安藤裕子
洞書　安藤楊風

大阪　生駒萩花
正華　石川知津子
有秋　石川洋子
八街　石渡翠径
八戸　市川紫泉
旭老　伊藤詠子
花舞　伊藤悦子
立精　猪股白慧
高陵　井上静香
誠和　入谷悠花
秀明　岩崎洋子
澄春　岩瀬祥園
〃　宇井楠麗
誠和　鵜澤琴舟
上泉　大沢淑江
椿翠　大島昌子
白琉　大塚真由美
秀明　大森喜代
書游　小野寺みよこ
雲溪　香川翠溪
旭老　加瀬晴美
樹原　葛恵美
大阪　金岡萩美
大雲　河合和敬
竹扇　河岡星扇
広島　川本南汀
彩　岸田東子
生大　北又春峡
正華　木原輝子
若葉　工藤山房
文筆　熊谷紫蘭
梓江　倉本翠径
大雲　高武玄城
千葉　河野恵子
たか　河野白篁
墨花　小口智子
大阪　小林萩江
椿翠　小林晃代
蒼原　齋田舞夢
芳蘭　斉藤江彩
澄春　齊藤静枝
〃　齋藤翠香
高崎　酒井知子
昌苑　坂巻麗苑
竹美　櫻田智舟
たか　猿渡篁右
桜草　澤田範子
八雲　七條裕美
弘舟　渋谷由美子
書游　庄司咏艸
蒼原　庄司櫻空
祥紫　杉田睦子
旭老　鈴木恭子
安波　鈴木つや子

選外167名氏名略

詢扇　鈴木利子
山王　鈴木春江
上泉　髙草木千代子
旭老　高橋真薫
東実　高山靖子
翠柳　近池柳芳
立精　千田白香
玄穹　千葉陽子
泉会　辻洋子
竜泉　土谷まつ江
大雲　積田雅雲
一宮　鶴田雅裕
高真　鶴淵亜希
大阪　冨田萩彩
千葉　戸村博舟
耕雲　土井弘枝
倉吉　中江みよ子
大阪　中西惠子
一葦　中村一琴
洞書　中村寛子
土気　西澤瑠美
紅風　西田雍子
白珠　西山葵龍
高陵　丹羽美恵子
水海　根岸とみ子
高崎　根津飛龍
洞書　濱田竹雪
土気　平山優子
澄春　深堀清洗
もく　福富惠子
書径　前田幸子
白珠　蒔苗由珠
白子　牧野優子
澄春　増田華秀
幕張　松島翠舟
白露　松村陽子
大雲　三浦道子
三嶋敏子
こだ　宮川洋子
春汀　宮野鼻満津枝
調布　武藤蕙睦
もく　森田藤谷
玉川　八重樫亜妃
高陵　山田明子
祥紫　山田京
竹扇　山村炎秀
東伯　山本真紀
竹美　横山蘭舟
もく　吉種藤玉
昌苑　吉田翠綾
京橋　吉田佑子
IS　六本木弘江
芳蘭　渡邉信溪